

体育系大学における新設スポーツ競技の競技力向上方策に関する 研究（その1）

— 女子サッカー部を対象事例として —

黒澤 尚、朴澤 泰治、中屋敷 眞

The research for a strategy of improving game skill as the Physical Education and Sport Science
— in the case of S - university women's soccer club —

KUROSAWA Takashi, HOZAWA Taiji, NAKAYASHIKI Makoto

This study is an attempt to establish the growth strategy of a university sport-club activity which just started and wants to get the successful result soon.

There are many kinds of elements for the growth strategy. Those of them are, for example, making the team-mission, finding talented-athletes, coaching for technical skills, physical strength and fitness, mentality, strength& conditioning-training, athletic- training, nutrition, managing the organization, guiding a daily-life, teaching the career education, and so on.

As the first stage research, sorting out the profiles of team-member who joined to the women's soccer club of S - university, and watching many women's soccer games, I classified those elements. And next time, I will study each element in detail to make the growth strategy of a university sport-club activity.

Key words: the growth strategy, university sport-club, Women soccer, game skill

1. はじめに

大学スポーツにおける部活動指導には様々な要素が存在するが、体育系大学における部活動指導においては、その要素として「スポーツ指導者養成という体育系大学特有の社会的使命を踏まえたスポーツ科学的・体育科学的アプローチ」という要素の存在と考える。個々のスポーツ種目における体育系大学としての各種の指導論、マネジメント論あるいは各種データの測定結果による考察等については数多くの先行研究がみられるところであるが、特定のスポーツ種目についてトップアスリート養成を目指し、体育系大学としての「部」組織の設置からその後

の育成指導の過程を通じ、各種要素の主要検討項目について体系的に比較検討・整理しようとする研究はあまり存在していない。

著者は、体育系大学および大学院に修学し、これまで企業チームその他各種現場において女子サッカーという特定種目の人材育成・指導に当たってきたが、3年前より体育系大学におけるトップアスリート養成を目指した部活動育成の任にあたることとなったことから、女子サッカー競技を通して、新設スポーツ部活動指導における体育系大学特有の社会的使命を踏まえたスポーツ科学的・体育科学的アプローチによる各種要素の体系的整理、ならびにトップアスリートとしての競技成果獲得のための各種寄与

方策の探求を研究テーマとして設定することとした。

ちなみに、大学の部活動指導あるいはサッカー指導などに関する諸要素に係る研究の取組みを第60回日本体育学会（広島）における発表だけから概観しても、次のような取組みが見られている。

- ・女子サッカー選手におけるサッカーのボールインパクト時の足関節動態（筑波大学）
 - ・わが国の女子サッカー史の変遷と今後の展望（吉備国際大学）
 - ・キック方向の変化がサッカーのインステップキック動作に及ぼす影響（名古屋大学）
 - ・サッカーとフットサルにおけるそれぞれのキック動作の特徴について（中央大学）
 - ・インステップキックにおけるボール飛距離と支持脚の関連（岡山大学）
 - ・オンゴーイング認知によるリフレクションの有効性に関する研究（新潟医療福祉大学）
 - ・サッカーにおける指導者からの言葉かけが選手の運動量および心理的側面に及ぼす影響（東海大学）
 - ・サッカー参加人数とコート面積がサッカーゲーム中の心拍数に及ぼす影響（広島大学）
 - ・サッカー小学生年代の守備（センターバック）に関する研究（鹿屋体育大学）
 - ・サッカーにおける攻撃時のスペースを活用するための戦術学習（筑波大学）
 - ・スポーツ論理力に関する研究（東海大学）
 - ・中国サッカー選手育成システムの動向と課題（鹿屋体育大学）
 - ・大学競技チームに対する心理的サポートの実践事例（大阪体育大学）
 - ・体育会活動状況からみる学生の感情、ストレス、コーチ不適応に関する研究（国際武道大学）
 - ・大学生アスリートのストレス改善に関する組織的介入の視点（順天堂大学）
 - ・大学生競技者のネガティブスピルオーバーに関する基礎的研究（順天堂大学）
 - ・スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデルの研究（九州大学）
- また、「体育学研究」などへの投稿論文にも

次のようなものがみられている。

- ・サッカーのパス技能と練習課題の制約との関連（中山ら・体育学研究 Vol. 52）
 - ・混戦型球技における移動特性および間欠的運動パターンの比較（谷所ら・体育学研究 Vol. 54）
 - ・運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係（上野・体育学研究 Vol. 51）
 - ・サッカー選手における膝関節伸展・屈曲トルクと大腿部筋体積の年齢変化（星川ら・体育学研究 Vol. 52）
 - ・サッカー熟練者と非熟練者の予測正確性および視覚探索方略に関する研究—1対1と3対3場面についての比較—（張剣ら・体育学研究 Vol. 53）
 - ・関東大学女子サッカー部創設の必要性和今後（石山ら・スポーツ産業学研究 19（1））
 - ・大学女子サッカー選手を対象としたサッカー特異性が含まれるフィールドテストの現状（氏平ら・関東学園大学紀要 15）
 - ・国際武道大学生の栄養摂取の現状と食生活改善に関する研究（成澤ら・武道・スポーツ科学研究所年報 9）
 - ・女子大学生サッカー部員の食物摂取状況と血液性状及び食意識、食知識について（竹村ら・体力科学 47（6））
 - ・女子サッカー部員における練習負荷前後のサーモグラムに関する研究（西ら・大阪教育大学紀要 3, 自然科学 42（1））
- 部活動指導に係る要素としては、体育系大学としての部活動に係るミッションの形成、育成対象人材の発掘・獲得、競技技術的指導、体力その他身体的指導、精神的指導、部活動マネジメントその他組織論的指導、コンディショニング&ストレングス、アスレチックトレーニング等の各種トレーニング指導、栄養指導、大学生生活を含めた日常生活指導、セカンドライフ等のキャリアプランニング指導、そして、スポーツ心理学・運動生理学その他これ等に関する体育系大学としての教育課程における関係科目等による教育その他教育資源の活用などが考えられる。

これらの各種要素について、今後、女子サッカー部という新設の部活動における指導実践を通じて、競技特性を踏まえた成果獲得に通じる各種要因等の調査・分析、方策探求の研究を、逐次、実施していくこととしているが、本研究においては、その第一弾として、部発足以降の3年間における所属部員に関する各種属性の整理等を通じた体育系大学のトップアスリートとしての競技成果獲得を目的とした部活動生成に参加する体育系大学志向の女子学生の属性状況、および各種大会の指導・視察等による情報収集を通じて整理した新設部活動育成に資する視点について報告する。

2. 調査目的・内容・方法

- ① 体育系大学のトップアスリートとしての競技成果獲得を目的とした部活動生成に参加する体育系大学志向の女子学生の属性

非体育系大学において、本来の大学教育活動ではない課外活動として学生生活あるいは大学機能の高揚を図るために大学スポーツ部活動を新設する場合、その特定目的に即した選手獲得活動を実施することはよく見られるところであるが、筆者の属する大学においては体育系大学という社会的使命も踏まえ部発足前からそのような明確な募集活動は実施してこなかった。それでも地域特性もあり、女子サッカー部の新設および体育系大学としてのトップアスリート育成および成果獲得という目的に対して学生の具体的参画が見られ、後述するとおり、ある程度の成果獲得という結果も見られている。

そこで、参加した学生のサッカーその他スポーツに関する競技歴、競技レベルなどの属性を把握することにより、発足後の経年変化を整理し、成果獲得という目的達成に対して必要となる部活動指導に係る各種要素の要因等の調査・分析、方策探求等の方向性を探ることとした。

- ② 新設部活動育成に資する視点

新設部活動を指導することとなって以降、国際大会も含めて積極的にサッカー競技試合を一

定目的のもとに視察することにより、成果獲得という目的達成に対して必要となる部活動指導に関する視点の整理を行うこととした。

3. 調査結果と考察

- ① 体育系大学のトップアスリートとしての競技成果獲得を目的とした部活動生成に参加する体育系大学志向の女子学生の属性

表1は、部発足後3年間の競技実績の推移である。3年間で所属する地区の女子サッカー界では上位に位置するところまでは到達しているが、大学サッカー界でも地区のトップチームに対しては常に後塵を拝している。表2に当該大学チームとの対戦成績の推移を整理したが、インカレ東北地域予選については年々得点差が縮小している。しかし、著者の主観的分析からキックの精度と飛距離、ボールコントロール力、1対1の守備力といった技術的要素、試合時間90分を通して必要な持久力、相手の動きやボールの動きに素早く対応するスピードと敏捷性といった体力的要素等において相手チームより劣っており、これらの課題克服が求められている。

表3～5は、部発足当時から3年間の所属部員の入部前の状況として、サッカー競技年数、小学校から高校までのスポーツ競技歴、高校時および大学サッカー部入部後の競技歴を整理したものである。整理対象は非レギュラーも含め所属部員全員である。

上述のとおり、部発足に際して目的に即した選手獲得活動を明確には実施してこなかったが、3年間の経過において部員数の増加とともにサッカー競技経験者が増加した。初年度は部員18名中、サッカー未経験者が11名、10年以上経験者が2名であったのに対し、3年目には部員21名中、未経験者ゼロ、10年以上経験者が10名となった。また、3年間ともに、中学時および高校時には殆どの学生がサッカーを含め何らかのスポーツ種目を経験してきている。実施種目のなかでは、比較的バスケットボール経験者が多く、3年目には小学校時からサッカーを経験してきた者が10名に達した。

表1 S大学女子サッカー部発足後3年間の競技成績

	初年度 (平成 19 年度)	2 年目 (平成 20 年度)	3 年目 (平成 21 年度)
部員数	18 名	20 名	21 名
大会名	花の森杯一般女子大会		
成績	3 位	3 位	非参加
大会名	東北地区大学教育リーグ		
成績	非開催	1 位	1 位
大会名	インカレ宮城県予選		
成績	2 位	非開催	2 位
大会名	インカレ東北地域予選		
成績	3 位	2 位	2 位
大会名	全日本選手権大会宮城県予選		
成績	非参加	1 回戦敗退	2 位
大会名	シニア・女子混合アムズカップ		
成績	非参加	3 位	2 位

表2 地区大学トップチームとの対戦成績

	初年度 (平成 19 年度)	2 年目 (平成 20 年度)	3 年目 (平成 21 年度)
大会名	東北地区大学教育リーグ		
成績	-	2 - 2 分	3 - 1 勝
大会名	インカレ東北地域予選		
成績	0 - 4 負	2 - 4 負	1 - 2 負

表3 所属部員のサッカー競技歴

年次	部員数	サッカー開始年齢 (人)			サッカー競技年数 (人)			
		14 歳未満	15 - 17 歳	18 歳以上	0 年	1 - 5 年	6 - 9 年	10 年以上
1 年目	18	4	3	11	11	4	1	2
2 年目	20	6	3	11	0	13	2	5
3 年目	21	11	3	7	0	9	2	10

表6は、発足後、北海道・東北学生選抜に選ばれた部員数、およびポジション別の推移である。年々、被選抜数が増加し、ポジションも多様化している。

② 新設部活動育成に資する視点

新設部活動の指導を開始して以降、次のサッカー競技を視察・観察した。

(国際大会)

2008 年 8 月 北京オリンピック予選
 中国人民共和国瀋陽市

2009 年 6 月 ユニバーシアード
 予選リーグ・決勝トーナメント
 セルビア共和国ベオグラード市

2009 年 9 月 仙台カップ 日本国仙台市

体育系大学における新設スポーツ競技の競技力向上方策に関する研究（その1）

表4 所属部員の小学校時・中学時・高校時の実施種目

年次	部員数	就学時期	実施種目（人）							備考 その他の 内容
			サッカー	バスケット ボール	バレー ボール	ソフト ボール	陸上競技	無	その他	
1年目	18	小学時	3	1	1	0	2	9	2	水泳・体操
		中学時	4	3	2	3	2	2	2	水泳・ハンド
		高校時	7	3	1	1	3	0	3	水泳・ボート
2年目	20	小学時	5	3	0	0	0	11	1	体操
		中学時	6	5	3	3	0	3	0	
		高校時	9	4	2	1	1	1	2	水泳・ボート
3年目	21	小学時	10	4	0	0	0	6	1	水泳
		中学時	11	5	1	2	0	1	1	バドミントン
		高校時	14	3	1	1	0	1	1	バドミントン

表5 小学校からサッカー競技を開始し継続している選手のサッカー競技におけるポジション

年次	対象部員数	ポジション（人）		
		MF	FW	DF
1年目	3	3	0	0
2年目	4	3	0	1
3年目	10	4	2	4

表6 大学入学後、北海道・東北学生選抜に選出された部員数

部員数	初年度（平成19年度）				2年目（平成20年度）				3年目（平成21年度）			
	5名				7名				9名			
ポジション別	MF	FW	DF	GK	MF	FW	DF	GK	MF	FW	DF	GK
	4	0	0	1	3	1	3	0	4	2	3	0

（国内大会）

2007年9月 インカレ予選宮城県大会
（仙台市）

2007年10月 インカレ予選東北地域大会
（弘前市）

2008年6・7月 南東北地区サッカーリーグ
（宮城県）

2009年1月 全日本インカレ決勝（東京都）

2009年5・7月 東北地区大学教育リーグ
（宮城県・山形県）

2009年9月 インカレ予選宮城県大会
（仙台市）

2009年10月 インカレ予選東北地域大会
（天童市）

2009年11月 インカレ予選プレーオフ大会
（金沢市）

2008年8月14日、瀋陽で開催されたオリンピックサッカー大会Bグループ予選リーグの第3戦、日本対オランダを視察した。ゲームは1対0でオランダが勝利し決勝トーナメント進出となり、日本は3戦全敗という結果に終わった。

視察にあたって、事前に様々な課題を設定した。

○技術面について、「パス」については、

- ① ボールを持っている選手（ボール保持者）が攻撃エリア・守備エリア・ニュートラルエリアにおいてどのようなキックを多く使っているのか、
- ② 得点あるいはシュートに至るパスの本数が日本、オランダともにおおよそ何本ぐらいであるか、
- ③ 次代を担う日本代表とヨーロッパの強豪と言われるオランダを比較してパススピードの違いを体感すること、

「コントロール（トラップ）」については、

- ① 味方からパスを受ける前にどのような姿勢・準備をしているのか、
- ② 味方からパスを受ける前に何を視野に入れてコントロールしようとしているのか、
- ③ 個人で攻撃方向を変えるためのどのようなコントロールの仕方をしているのか、
- ④ 浮いたボールを自由自在にコントロールするための技術は何なのか、
- ⑤ 浮いたボールを正確にコントロールするためにはどのようなタイミングでボールタッチするのか、

「1対1の守備」では、

- ① 相手が前を向いてボールを持っている際の守備の間合いの詰め方と構え、
- ② 相手が前を向いてボールを持っている際の足の出し方（ボールの奪い方）、
- ③ 相手からボールを奪いに行く際の体の使い方、
- ④ 守備意識の高い日本代表選手のアプローチのスピードとステップワーク、
- ⑤ チーム全体としての守備意識の高さがどれくらいであるか、

などを課題項目とした。

○戦略・戦術面について、「攻撃」では、

- ① どのようなプランを持って得点をねらっていくのか、
- ② 最後のところで得点できる能力（決定力）を発揮できるか、
- ③ アイデアのある攻撃やサイド攻撃などをどの程度活用できるのか、
- ④ 体格・スピードに優れた相手に対して、あ

るいは 主導権を圧倒的に握られるゲームに対して、攻撃の人数のかけ方およびポジショニングの取り方をどうするのか、

「守備」では、

- ① 日本代表のチームとしてどのようなボールの奪い方をしているか、またそれを可能にするためのポジション取り、
- ② ゲームの時間帯やペースによってボールを奪うエリアが変化しているのか、
- ③ ボールを持っていない者に対しての個人戦術とチャレンジ&カバーといったグループ戦術を成立させるために、ボールを持っている者に対してどのくらい守備意識を高く持って行っているのか、
- ④ 上記の点について夏の炎天下でフィジカル・メンタル的にどのくらい強く意識して戦えるのか、
- ⑤ オランダが攻撃時に守備面でどのようなリスクマネジメント（守備の人数やポジション取り）をしているのか、

などを課題項目とした。

さらに、日本代表の反町監督がゲームにおいて自分達のペースの時間帯、相手に主導権を握られている苦しい時間帯などプレーヤーに対してメンタル面でどのような声かけをしているのか等も課題とした。

一方、国内大会においては、部活動育成の視点として、オリンピックサッカー大会と共通項目を各試合の実践課題として設定した。すなわち、オフense面については、JFA女子テクニカルレポート2009¹⁾に、ビルドアップ、組み立て、フィニッシュ各段階とゴールとを結びつけるためにはキックの質が問われるとあり、サッカーのゲームにおいてオフenseを優位に進めていくためにはキック系技術を高めていくことの重要性を示していること、また、2006 FIFAワールドカップドイツJFAテクニカルレポート²⁾では、現代のモビリティのあるゲーム運びでは動きながらの正確なボールコントロール技術が必要不可欠であるとしていることから、「キックの質」および「動きながらのボールコントロール技術」に着目して比較観察した。また、ディフェンス面では「1対1の守備の状

況」に着目した。さらに、90分を通しての「体力」の状況も比較観察した。

その結果、S大学女子サッカーチームは総じて、「キックの質」についてはパスの成功率が低い傾向がみられた。具体的には、味方・相手の状況に合わせて利き足、非利き足ともに差がなく、正確に蹴ることが少なかった。また、自軍エリアで失点に直結するようなキックミスが多かった。個々のキックの飛距離と精度、パススピードの向上が課題として挙げられた。「動きながらのボールコントロール技術」では、プレッシャーの速い相手に対してや浮き球のボールに対してトラップの精度を欠き、ボールを失うことが多くみられた。正確にボールを止めることが重要であると認識した。「1対1の守備の状況」については、勝負が決まった失点の局面では、守備の基本であるステップワークや間合いの取り方、構えの習得ができていないことが多くみられた。また、スピードのある攻撃選手に対応するために必要なスピードや敏捷性が不足していた。「体力」面では、持久力とスピードに差がみられた。

これらから、事前に設定した項目については、すべて今後の克服課題であることが確認できた。

4. まとめ

以上の調査結果から、今後、女子サッカー部という新設の部活動における指導実践を通じた成果獲得に資する各種要素の調査・分析、方策の探求等について、次のような観点からのアプローチが必要と考える。

①部活動に係るミッション

江口⁴⁾らは、「良い素材を上手に育てる」ことをできることが強いチームを作るという目的達成には近道であると述べている。体育系大学の社会的使命を踏まえた女子サッカー部の部活動としてどのようなミッション（チームコンセプト）を形成するかを模索するに際して重要な視点と考えられる。

②育成対象人材の発掘

各種視察、地域の各高校との練習試合を通して指導者間のネットワーク構築および交流、

大学OBが指導しているチームを対象としたフェスティバル開催などが人材発掘・獲得の視点となる。

③競技技術指導

日本サッカー協会指導指針、指導DVD等の活用、資料収集のための各種サッカーチームのトレーニング視察、などが競技技術指導の視点となる。

④体力その他身体指導

宮城ら⁵⁾が実施した体脂肪率改善のトレーニング、インターバルトレーニングやサーキットトレーニングなどの実施が体力その他身体指導の視点となる。

⑤メンタル的指導

「メンタル」面については競技レベルが高くなるほど重要であることから、「メンタルトレーニング」の実施などが視点となる。

⑥栄養指導

資料を用いた知的トレーニングに加え、意識改革とパフォーマンス向上のための栄養サポート研究会等の学内資源の活用が栄養指導の視点となる。

⑦部活動マネジメントおよび日常生活指導

学生スタッフ体制の確立、「用具・施設の管理、維持」、「整理、整頓、躰、清掃、清潔」の指導などが視点となる。

⑧キャリアプランニング

全日本大学連盟主催の日本サッカー協会公認C級ライセンス講習会の受講と指導者資格取得、審判講習会の受講と指導者資格取得を幹旋し、現場指導だけでなく、中学・高校大会への積極的な審判の派遣を図り、経験を積むこと等が視点となる。

本研究では、女子サッカー競技を通し体育系大学におけるトップアスリート養成を目指した新設スポーツ部活動の育成について、体育系大学特有の社会的使命を踏まえたスポーツ科学的・体育科学的アプローチによる各種要素の体系的整理、ならびにトップアスリートとしての競技成果獲得のための各種寄与方策の探求に向けて、今後の調査・分析の対象要素の抽出という観点から、第一段階として、発足当初の参

加学性の属性を確認するとともに、事前の課題抽出を踏まえた各種サッカー試合の視察を実施し、アプローチすべき要素を整理した。

参考文献

- 1) JFA 女子テクニカルレポート 2009 (2009). (財) 日本サッカー協会女子委員会. pp12 - 13
- 2) 2006FIFA ワールドカップドイツ JFA テクニカルレポート (2006). (財) 日本サッカー協会. pp16
- 3) JFA Technical news Vol.25. (財) 日本サッカー協会機関紙. pp53
- 4) 第 17 回サッカー医・科学研究会報告書 (1995). pp37 - 40
- 5) 第 12 回サッカー医・科学研究会報告書 (1992). pp1 - 4